

# 聖書に準拠するシェイクスピアの 思考・用語

清 水 護

## I

ヘンリー五世は皇太子の時には無頼の徒の群に伍してその身边おさまらず、関係者を悩まし、国の行く末を案じさせたが、一旦即位するや、たちまち豹変して名君と仰がれるに相応しい手腕、仁徳を発揮したと伝えられる。この辺の消息は *Henry V* I. i の Archbishop of Canterbury の台詞に明かである。

The breath no sooner left his father's body,  
But that his wildness, mortified in him,  
Seem'd to die too; yea, at that very moment,  
Consideration like an angel came,  
And whipp'd th' *offending Adam* out of him,  
Leaving his body as a Paradise,  
T'envelop and contain celestial spirits. (ll. 25-31)

(父王が息を引きとられると、入れちがいに彼の粗暴が殺されて死んでしまったと見える。いや、その瞬間、自戒の念が天使のように天降ってパラダイスに比すべき彼の体に、代って神聖な精神を育て住わしめるため不埒なアダムを叩き出したのである)

言うまでもなく、ここには創世記 3 章 23-24 の楽園追放のイメージが主なる背景をなしているが、この *offending Adam* は Paul の言う *old man* (=old Adam) に相当するものである (cf. *Colossians* 3. 9-10: Lie not one to another, seeing that ye have put off *the old man* with his works, And have put on *the new* . . .—Genevan Bible (綴り字は現代の形に改めた)) のみならず、この一節は『祈禱書』(The Book of Common Prayer) の洗礼式 (“The Order of Baptism”) の式文の一部とも

密接な関係があるようである。

...grant that *the old Adam* in this child may be so buried, that *the new man* may be raised up in him.

Grant that all carnal affections may die in him, and that all things belonging to *the Spirit* may *live and grow in him*.

(grant) that he, being dead unto sin..., and being buried with Christ in his death, may *crucify the old man*, and utterly abolish the whole body of sin. (1560年版と同文。綴字は現代化)

このように「新しき人」として生まれ変わった新王は、国内の統一を実現し、ほとんど理想的王として称えられるのである。この劇に登場する将兵の中には英国人のほかに、ウェールズ人、スコットランド人、アイルランド人等がおり、往々お互に口論をやるが、王軍の一員としては一致した忠誠心を持っている。

はじめにスコットランド人の大尉 Jamy の台詞を取りあげて見る。III. ii で彼はハーフラー市攻囲中に、二三の将校と兵法論を戦わそうとしながらかく言う：

By the mess, ere these *eyes* of mine take themselves to *slomber*, ay'll de gud service, or ay'll lig i' the grund for it; ay, or go to death.

(いや、自分は、誓って、この眼玉の黒いうちに、立派なご奉公を仕るですが、できな<sup>じ</sup>きゃ<sup>へたば</sup>地面に平臥ります、はい、それができな<sup>じ</sup>きゃ死にます——坪内訳)

ここの *slomber* (=slumber) (眠り) と *eyes* 又は *eyelids* を結ぶ言い方は詩篇にある：

*Psalter*<sup>1</sup> 132.4: I will not suffer mine *eyes* to *sleep*, nor mine *eyelids* to *slumber*.

詩的な 'slumber' という語を戦陣中談話の中に用いているのは、語り手が将校であって、相当の教育があることを想定しても、*eyes* と並べて用いているのは、断定はできないが何か色がついている様に思われる。

次に、アジンコートが決戦の前夜、ヘンリー五世が一士官に扮して将兵の中に混り、雑談のうちにあるのままの英軍の志気を探ろうとする IV. i で、王が兵卒の Michael Williams とたいへん長い台詞で談合するくだりがある。その時の王のことばにはいくつも聖書からの比喻が織りこまれて

いて、分析が困難なほどであるが、その一節に、戦死するのは前科のむくいであるという、一見異様なくだりがある。その前後で、たとえ人間は法をくぐって人間の手から逃れることはできても、神から逃れる翼はないと  
いっている：

Now, if these men have defeated the law and outrun native punishment,  
though they can outstrip men, they have *no wings to fly from God*. (IV. i.  
175 ff.)

これは神の遍在を歌った *Psalter* 139. 8 f: *If I take the wings of the morning: and remain in the uttermost parts of the sea; . . . thy right hand shall hold me*. から取ったものと見て間違いないであろう。そのあと直接戦死に関して、陣中の兵士は病床における病人のごとく、おのおのその良心から汚点を洗い去っておくべきである。そうして死ねば、死もまた益であると言う：

Therefore should every soldier in the wars do as every sick man in his bed, wash every mote out of his conscience: and dying so, *death is to him advantage*. (IV. i. 187 ff.)

これは

*Philippians* 1.21 (Bishops'): For Christ (is) to me life, and *death is to me advantage*.  
(Genevan: For Christ is to me both in life, and in *death advantage*.)

と比較する必要がある。Shakespeare は Genevan Bible から引いていると思われる場合が多いが、ここは Bishops' Bible の訳に近い。何れにしても *death* と *advantage* の結びつきが聖書によるものであることは否定できないであろう。

『ヘンリー六世第一部』の冒頭、ヘンリー五世の葬儀の場では、ベッドフォード卿、グロスター卿、エクセター卿、ウィンチェスターの司祭等が入れ替り名君の死を悼むと共にその偉業、とくに武勲を、口を極めてたたえている。その一節：

Bedford. . . .  
King Henry the Fifth, too famous to live long!  
England ne'er lost a king of so much worth.

Gloucester. England ne'er had a king until his time.

...

He ne'er lift up his hand but conquered. (I. i. 6-8, 16)

(ヘンリー五世王、王は高名に過ぎて高齢には至らなかったが、英国は未だ曾てかくも偉大な王を失なつたことはない。/ 王出でてはじめて英国に王あり... 王はひとたび手を挙げれば必ず勝つ)

Winchester. He was a king bless'd of *the King of kings*,

Unto the French the dreadful judgment-day

So dreadful will not be as was his sight.

The *battles of the Lord of hosts* he fought:

The church's prayers made him so prosperous. (I. i. 28 ff.)

(王は諸王の王(天帝)の寵児であられた。フランス人めらには恐ろしい<sup>さばき</sup>審判の日も、王に出逢うほどには恐ろしくないであろう。王は万軍の主の戦いを戦い給うた。教会の祈りが戦勝をもたらしたのである。)

ウィンチェスターの司祭のことばからの引用句の最後の行は、教会人の発言であることはもちろんであるが、ヘンリー五世が常勝の名君と謳われるかげには、教会の祈りがこれを支えていたのであるという宗教的面を強調している点も、英国民の体質を理解する上に重要な一面であると思う。さてここでウィンチェスターの司祭の言う 'King of kings' は *Revelation* 19. 16: And he hath upon his garment, and upon his thigh a name written, THE KING OF KINGS, AND LORD OF LORDS (Genevan) に見られる (the supreme) God を意味する句であるが、*I Samuel* 25. 28 を見ると Abigail という賢婦人がダビデについて "my lord [i.e. David] *fighteth the battles of the Lord*" (Genevan) と言ってイスラエルの王を称えている。*Amos* 9. 5 には And *the Lord God of hosts* shall touch the land, and it shall melt away. と万軍のエホバの力を強調する句があり、またヤコブ(=イスラエル)がヤボクの渡しを渡る時、天使と角力をとってこれに勝つたという故事(創世記 32. 24, etc.) について、ヤコブには万軍のエホバがついているという意味を *Hosea* 12. 5 は Yea, *the Lord God of hosts*, the Lord is himself his memorial. と謳っている。これらの聖句を参照するならば、上に引いたウィンチェスターの司祭が言う The battles of the Lord of hosts he fought の句の背景が明らかと

なるであろう。類似の発想で広く注目を浴びたのは、1897年のヴィクトリア女皇の在位60年祝祭 (Diamond Jubilee) にあたり、Kipling が1月22日の祭典の日に祝歌として献呈した *The Recessional* の詩句である。その第1節：

God of our fathers, known of old—  
Lord of our far-flung battle-line—  
Beneath whose awful Hand we hold  
Dominion over palm and pine—  
*Lord God of Hosts*, be with us yet,  
Lest we forget, lest we forget!

(遠く示しうけたるわが父祖の神——広くうち拡げし戦線の主——そのいかめしきみ手の下に、われら棕櫚と松柏の国々を治む——万軍の主なる神、なお我らと共にませ、我ら忘れざらんため、忘れざらんため) (この詩については拙著『英国民の伝統と聖書』p. 188 参照)

これはまさに英帝国の偉大を誇示し、謳歌するのにふさわしい詩句であるが、「これはまるでユダヤ人がイスラエルの最盛期に書いたのかと思われる詩ではないか」(R. Macaulay, *Told by an Idiot* II. xxvi に見る Stanley という少女のこの詩に対する率直な反応) といふかりたくなるのは、ひとり Stanley のみではないであろう。しかし、この発想をさかのぼると上述のヘンリー五世への讃辞へも通じるのである。さらに John Donne にも類似の思想が<sup>2</sup> 見られるところから推すと、これは王権に対するイギリス国民の信仰ないし思想の伝統と見ることができよう。

序ながら、ヘンリー五世と並んで、ヘンリー八世の皇女エリザベスの命名式において、この infant Elizabeth の Godfather であり、かつ Archbishop of Canterbury である Cranmer の祝辞は、皇女の未来を祝福するのが目的であるから、国家の安寧、繁栄について、最高の夢が謳われて然るべきであるが、その比喻がやはりイスラエルの最盛期ソロモン王の事績にちなんでいることは興味をひくところである：

Cranmer. . . . *Saba*<sup>3</sup> was never  
More covetous of wisdom and fair virtue  
Than this pure soul shall be: . . .

...good grows with her:

In her days every man shall eat in safety,  
*Under his own vine*, what he plants; and *sing*  
The merry *songs of peace* to all his neighbours.

(*Henry VIII* V v. 24-26; 33-36)

(シバの女王が知恵と仁徳を求めたというその心も、この清らかな皇女に及ばないでしょう。...御成長と共に民の幸は増し加わり、その御世には、民は己がぶどうの木の下で、自ら植えたものを安全に食し、隣人と共に泰平を謳歌するであります)

*I Kings* 4. 20-5 (Genevan) には *Judah and Israel were many, as the sand of the sea in number, eating, drinking, and making merry...*  
25 *And Judah and Israel dwelt without fear, every man under his vine, and under his fig tree...all the days of Solomon* (*Micah* 4. 4 にも同様な句が見られる) とある通り、めいめいが自分のぶどうの木といちじくの木の下に憩うというのは、イスラエルとしては理想的平和と繁栄のしるしであった。フランスとぶどうならば今でも自然に聞えるが、英国とぶどうの組合わせはかなりの異和感を伴うにも不拘、クランマーの祝辞をそのままに受取るのはやはり前述の伝統的英国国民の思考傾向によるものであろう。

## II

また王権は神から授けられたもので、王は神に代って政を行い、正義を行うものであるという思想が確立していることも注目すべきである。この点で最も顕著な例は *Richard II* IV. i で Bolingbroke が王リチャードを退位に追いこみ、みずから王座に就こうとする時、Bishop of Carlile が、臣下たる人間が神の聖別し給うた王を勝手に裁くことの不当を堂々と糾弾する一節である：

What subject can give sentence on his king?  
And who sits here that is not Richard's subject?  
Thieves are not judged but they are by to hear,  
Although apparent guilt be seen in them;  
And shall the figure of God's majesty,

His *captain*,<sup>4</sup> *steward*, *deputy-elect*,  
*Anointed*, crowned, planted many years,  
Be judged by subject and inferior breath,  
And he himself not present? (ll. 121 ff.)

(臣たる者、誰が王に宣告を下すことができます。ここに居る者で、王の臣下でない者がおりましようか。盗人といえども、その席に居合わずに裁かれることはありません、たとえ罪状が明かであっても。然らば、神の将帥、執事、選ばれしご名代、聖油で聖められ、冠をいただき、多年その座におられた神のみ姿なる王を、身分ひくき臣が、その不在中に裁くことが許されるのでしょうか)

ここに ‘deputy-elect’ が使われているが、これより前に、反軍の将 Bolingbroke に追われたリチャード王は III. i で ‘anointed king’ としての意識とともに王は神に選ばれた名代であるぞよと反撥している：

Not all the water in the rough rude sea  
Can wash the balm off an anointed king:<sup>5</sup>  
The breath of worldly men cannot depose  
The *deputy elected by the Lord*. (ll. 54 ff.)

(荒海の浪をつくしても聖油を注がれた王からその芳香を洗いおとすことはできぬ。神の選び給うた名代を、人間のことばで退けることはならぬ。)

これは 16 世紀の Tudor 王朝時代に擡頭したという王権神授説 (Divine Right of Kings) の反映と見ることができるが、これが聖書に基づく思想であることは、リチャードのことばだけからでも察せられる。さらにこの考えが顕著に現われているのは *Measure for Measure* I. ii である。罪を犯して捕えられた Claudio は牢へ行く前に見せ物にされるのを不服として Provost (典獄) に抗議すると Provost は、これは自分が意地悪くするのではない、不在中の Duke<sup>6</sup> の代理者である Lord Angelo の特別の命令によるのだと釈明する。これに対して Claudio は

Thus can the *demigod Authority*<sup>7</sup>  
Make us pay down for our offence by weight  
The words of heaven. (ll. 124 ff.)

(こうして神に代る権威者は、我々にその罪科の軽重に従って神のことば通りに償いをさせるのだな)

と独白のように諦める。その後 Claudio は Angelo のため死刑を宣せら

れたので、妹の Isabella は Angelo のもとへ助命に行き、Portia が Shylock に mercy の徳を説く場面に酷似した台詞で訴える：

Not the king's crown, nor *the deputed sword*,  
The marshal's truncheon, nor the judge's robe,  
Become them with one half so good a grace  
As mercy does. (II. ii. 60 ff.)

(王冠も、ご名代のみ剣も、大元帥のお杖も、裁判官の法衣も、お慈悲ほどご身分にふさわしいものはございません)

この第 I 行の後半の句に対しては *Romans* 13. 4: For he *beareth not the sword* for nought: for he is *the minister of God* to take vengeance of him that doeth evil (Genevan) (為政者はいたずらに剣を帯びているのではない。彼は神の僕<sup>しもべ</sup>であって、悪事を行う者に対して怒りを以って報いるからである)(13. 1-3 も重要)が 'deputed' の意味をはっきりさせるであろうが、さらに変装して舞台に現れる Duke が極刑を命じた者の行状について漏らす次の句も味わうべきである：

He who *the sword of heaven will bear*  
Should be as holy as severe. (III. ii. 275 f.)

(天に代って剣をとる者は、峻厳であるとともに聖潔でなくてはならぬ)

さて、この劇の title について考えると、これは「オセロー」の 'wife for wife' (II. i. 308) にならった型であることは明かであるが、全篇の終り近くでの Duke の台詞：

The very mercy of the law cries out  
Most audible, even from his proper tongue,  
An 'Angelo for Claudio, *death for death!*'  
*Haste still pays haste, and leisure answers leisure;*  
*Like doth quit like, and measure still for measure.* (V. i. 412 ff.)

(慈悲を本意とする国法も、みずからのことばで、声を限りに叫んでいる、クロードイオを償うのにアンジェローを、死の償いには死をもってせよと。急ぎは急ぎの報いを得る、緩きには緩きが応じ、類は類を以て、尺は尺を以て報ゆるのが常法である)(ここの第 I 行については II. ii. 100 を参照。)

には題名も列挙された対句の中に含まれている。これには *Matthew* 7. 2: For with what judgement ye judge, ye shall be judged, and with



what measure ye mete, it shall be measured to you again (Genevan)  
は勿論、*Genesis* 9. 6; *Leviticus* 24. 17-20; *Exodus* 20. 23-25:

thou shalt give *life for life, Eye for eye, tooth for tooth, hand for hand, foot for foot, Burning for burning, wound for wound, stripe for stripe.*

等をも参照すべきである。(なお *Henry VI II.* vi. 55; *Titus And.* V. iii. 66: “There’s meed for meed, death for a deadly deed!” も参照。)

シェイクスピアの作品の表題として直接聖書の語句が用いられているのは *Measure for Measure* だけであるらしいが、この題からも察せられ、また以上すでに触れて来た実例から推しても、この作品には聖書の用語と関連の深い場所が多く見られる。それには一見して明瞭な場合と、捕えにくいほど変容している例もある。これから旅に出ようとする Duke が、留守を託したい Angelo に言い聞かせることばには、判然としてはいないが聖書からの比喻が含まれていることを認めてよいのではなからうか。

Duke. . . .Thyself and thy belongings  
Are not thine own so proper as to waste  
Thyself upon thy *virtues*, they on thee.  
Heaven doth with us as we *with torches do,*  
*Not light them for themselves; for if our virtues*  
Did not go *forth of us,* 'twere all alike  
As if we had them not. Spirits are not finely touch'd  
But to fine issues, nor Nature never lends  
The smallest *scruple of her excellence*  
But, like a thrifty goddess, she determines  
Herself the glory of a *creditor,*  
Both thanks and *use.* (I.i. 30 ff.)

(お前の才徳はお前の所有物には相違ないが、それを自身の為のみに、又は自分をその為のみに消費してもよいという物ではない。天は人間を、人間が松明なまつを使うように、お使いなされる。松明は、松明自身を照らすための物ではないと同様に、もし才徳が他人を裨益する用をしなければ、それは有れども無きにひとしいと云わなければならない。そもそも人の精神が靈妙たましいに造られてあるのは、つまり、靈妙な結果を生ぜしめようが為である。けだし、造化が仮りにもその靈能の幾分かを人間に貸与する場合には、彼女は本来が吝い女神しわだから、債主たるの権利上、謝礼はもちろん、利子さえも取らなければ承知しないのだ——坪内訳を参考)

前半について考えると、松明が not light them for themselves はマタイ伝 5. 15 f.:

Neither do men light a candle, and put it under a bushel, but on a candlestick, and it *giveth light* unto all that are in the house. (16) *Let your light so shine* before men, that they may see your good works, and glorify your Father which is in heaven.

の比喻(ルカ伝 8. 16 にも類似の句が見える)を背景に持っていることは一般に納得できるところであろう。Lever は Arden Shakespeare のこの注解で、Lyly's version in *Campaspe, Prol. at Court*, 17 'these torches, which giuing light to others, consume themselues,' is closer than Luke to the Duke's words. と指摘しているが、もとは福音書によると言って差支えなかりう。さらに 'virtue' には 'power' の意味もあるので、ルカ伝 8. 46: And Jesus said, Some one hath *touched* me: for I perceive that *virtue is gone out of me* (6. 19, マルコ伝 5. 30 も参照) も併せて考えられるように思う。

後半 (Spirits are not...) について考えると、*The Complete Pelican Shakespeare* (gen. ed. A. Harbage) は *But...issue* を "except to the extent that something fine comes of them" と説明し、"...the tree is known by his fruit" (*Matthew* xii. 33) を付記している。上記 virtues...より更に識別困難な感がある。'scruple' は 'small weight or measure,' 'use' は 'usury,' 'interest' と解せられるから、'smallest scruple of...' は one talent に相当すると解することができる。そうすれば、ここは主人が旅に出る時、使用人たちを呼んで各人それぞれに異った額の talent(s) を貸し与えておき、帰国に際してそのあと始末について報告を聞くマタイ伝 25. 15-27 の話を、Duke 自身が変装していたように、生地を変えた衣を着せて、そっと背後に潜ませたものと解されよう。

### III

'Candle light' の比喻が *Measure for Measure* のはじめに用いられていることは既に述べたが、Portia が *Merchant of Venice* の最後に近く、

侍女 Nerissa を伴い乍ら、Belmont の自分の家敷に近づいた時、明りが  
広間にともっているのを見て、

That *light* we see is burning in my hall.

How far that little *candle* throws his beams!

So shines a good deed in a naughty world. (V. i. 89 ff.)

と闇を照す光明の力と尊とさを謳っているのもマタイ伝 5. 15 f. の内容に  
準拠するものであろう。世を照す光という明るいイメージは新約聖書と結び  
つくが、旧約には罪がある者の光りは消されるという暗い連想を伴う用法  
が目立つ。Macbeth V. v. 22 の Out, out, *brief candle*! について Dover  
Wilson は Prov. xx. 27: (AV) The spirit of man is the *candle* of the  
Lord... を比較しているが、Shakespeare と直接関係があったと思われ  
る Genevan では、このところは The *light* of the Lord is the breath  
of man... となっていて、『マクベス』の有名な句とはいくぶん違和感が  
ないでもない。この聖句はむしろ『オセロー』の

Put out the *light*, and then put out the *light*. (V. ii. 7)

と密接に関係づけられるようである(ヨブ記 18. 5-6; 箴言 24. 20 等も比  
較)。この行については他所(『英語青年』1974年4月号 p. 15)で触れたの  
で、ここでは夫人の死を聞いた直後のマクベスの悲壮な台詞(V. v. 16 ff.)  
のいくつかの点について考えて見る。この中には作者がどこ迄意識的に用  
いたかは不明な場合もあるが、どの程度聖書の語句、比喩などと関係づけ  
て理解し得るか、又どうしてこういう英訳が行われるに至ったか、などに  
ついては問うて見たい。

Seyton. The queen, my lord, is dead.

Macbeth. She should have died hereafter;

There would have been *a time* for such a word.

To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,

Creeps in this petty pace from day to day

To the last syllable of recorded time,

And all our yesterdays have lighted fools

The way to *dusty death*. Out, out, *brief candle*!

Life's but *a walking shadow*, a poor player

That struts and frets his hour upon the stage  
And then is heard no more: it is *a tale*  
Told by an idiot, full of sound and fury,  
Signifying nothing.

妃の訃報に接して、マクベスは、いつかは死ぬ身だ、こういう知らせを聞く時がいつかは来たであろうと、悲しみを抑えながら悟りのことばで答えているが、ここの *a time for such a word* は *Ecclesiastes* (伝道の手紙) 3. 2 ff. (Genevan):

To all things there is an appointed time, and *a time to every purpose under the heaven.*

A time to be born, and *a time to die* . . . 4 A time to weep, and *a time to laugh.*

にちなむ句と考えられる。また *Titus Andronicus* 3. 1. 263 ff. にも *a time to laugh* と結びつけて考えられる台詞があるが、*a time to* にせよ、*a time for* にせよ、ごく普通の言い方であるから格別意識的に用いられたものとは断定できないであろう。しかし Biblical echo は多少なりとも感ぜられるのではなからうか。以下この有名な独白の後半について少しく考えて見たい。

明日が来り、明日が去り、また来っていつしか世の終りにいたることを謳ったのち、すべて昨日<sup>きのう</sup>という昨日は道化<sup>フル</sup>が死んで塵に帰って行く道を照して来たのだ、という意味の一段で *dusty death* は

*Psalter* 22. 15: thou shalt bring me into *the dust of death.*

*Genesis* 3. 19 (Genevan): . . . because thou art *dust*, and *to dust* shalt thou return.

*Prayer-Book*, "Burial of the Dead": we therefore commit his body to the ground; *earth to earth, ashes to ashes, dust to dust.*

等の融合した形と取られるが、オフィーリアが流れに落ち、水を呑んだ着物の重みで静かに泥濘の河床に沈んで行く様を *her garments . . . pull'd the poor wretch . . . To muddy death* (*Hamlet* IV. vii. 182-184) と報ずる Queen の悲しみのことばの中にも、人が死んで塵に帰ることを謳った *dusty death* と同じ型を見る。又『祈禱書』の "earth to earth, ashes to

ashes, dust to dust” は

Sweets to the sweet: farewell! (V. i. 266)

(美しい人に美しい花を)

とオフィーリアの墓に花を撒いて別れを惜しむ王妃の美しいことばを生んだのであるまいか。

Life's but a *walking shadow* には前行の 'candle' の灯影の連想もあるように感じられるが、次の旧約の二つの句とも比較する価値があろう：

Job 8. 9: For we are but of *yesterday*, and are ignorant: for *our days* upon earth are but *a shadow*. (Genevan)

*Psalter* 39. 6-7: Behold, thou hast made my days as it were *a span long*:... and verily every man living is altogether *vanity*.

7 For man *walketh in a vain shadow*.

同時にこの *we are but of yesterday, and are ignorant* の一行は *All our yesterdays have lighted fools...* の一句に全然影を落していないとは断言できないのではなからうか。なお *Midsummer Night's Dream* V. i で、あの珍無類な劇の途中で Hippolyta が *This is the silliest stuff that ever I heard.* (こんなばかげた芝居は、はじめて) とつぶやくのに対し、Theseus が *The best in this kind are but shadows* (ll. 212 f.) (どんな良い芝居だって、所詮、影法師にすぎないのだ) と答えるところも *candle light* → *shadows* → *players* (→ *nothing; vanity*) という連想に基づくものと考えられ、マクベスの悟りの句といっしょに扱いたい気がする。とくに 'walking shadow' と *Psalter* 39. 7 の *man walketh in a vain shadow* は切り離し難い関係にあるように思われる。また、'vanity,' 'vain' は signifying nothing の形で映し出されているとも言えよう。

最後に、*It is a tale told by an idiot...* について。これは *Psalter* 90. 9: *We bring our years to an end, as it were a tale that is told.* がもとの様であるが、何故人生は語られた物語の如しという比喻が生れるのであろうか。この点種々の英訳聖書を比べて見ると訳し方がまちまちで、全然無関係と思われる文字が当てられていることさえある。Genevan では *we have spent our years as a thought.* とあるが AV 及び RV で

は本文は *Psalter* と同じであるが、*marginal note* にそれぞれ ‘*Or, as a meditation*’, ‘*Or, a sound or sigh*’ と断っているので、Geneva 訳の妥当性というか、可能性を認めていると言うことができる。試みに近代訳も含めて数種の訳を比較して見よう：

our years come to an end *like a sigh*—*Revised Stand. V.* (RSV)  
our years die away *like a murmur*—*New English Bible* (NEB)  
our life is over *like a sigh*—Moffatt.  
swift *as a breath* our lives pass away (R. Knox)

これらの訳 (RSV と Moffatt 訳は同じ) は呼気と関係のある語であるので束の間という意味は汲みとれる。然るに Douay Bible と Smith 編の American Translation では、思いがけない ‘*spider*’ と ‘*cobweb*’ が当てられている：

our years shall be considered *as a spider*—Douay (1609)  
our years are *like a cobweb* swept away—American Tr. (Smith)

一見無関係と感ぜられる二つの訳語 (群) の橋渡しの参考になるのは 1966 年の *Jerusalem Bible* で、その本文には *our lives are over in a breath* とあって、やはりカトリック系の R. Knox 訳と同じであるが、(in a) *breath* に次の注がついている：

‘*breath*’: Lit. ‘*like a sigh*’ Hebr.; Syr. ‘*spider*’, a word added in Greek and Vulg.

即ちヘブライ語原典では ‘*sigh*’ 又はこれに類した意味の語 (*hegeb*) が使われているが、シリア語訳聖書と、ギリシア語の 70 人訳 (LXX) およびラテン語の Vulgate では ‘*spider*’ に相当する語がはいっているということである。手許の Vulgate を見ると、ここは *anni nostri sicut aranea* (i.e. ‘*spider* (’s web)) *meditabuntur* とあって、Douay 訳がこれに近い。ここで ‘*Vulgate*’ 翻訳の歴史について一言ふれると、古くから愛誦されてきたといわれる Old Latin Version (LXX をもとに訳されたという) は A.D. 383 と A.D. 387 の 2 回 Jerome が改訂している。2 回目の改訂版は Gaul 地方で広く用いられたのでその詩篇は Gallican Psalter (*Psalmi Juxta LXX*) と呼ばれて普及し、その後の訳文がそれに取って代

ることを許さなかったと言われている。その後 Jerome は A.D. 389 から 14 年にわたって直接ヘブライ語から旧約を訳し、その真価が認められてこれが The Vulgate の名でローマ・カトリックの公認聖書となるのであるが、詩篇に関する限り、今日一般に用いられている The Vulgate の訳文は Gallican Psalter であることを注意する必要がある。即ち Jerusalem Bible の注で Vulg. (=Vulgate) とあるのもこれを指す。従って一般の読者はヘブライ語をもとにしてあとでできた Jerome 訳の詩篇 ('Hebrew' Psalter) に接する機会が少ないのであるが、幸い、1969 年版、Stuttgart 出版の *Vulgata* には Gallican Psalter と 'Hebrew' Psalter とが併べて印刷されているので、これによって後者を見ると、問題のところは “consumpsimus annos nostros quasi sermonem loquens” (we spend our years as a tale (or speech) one is speaking) とある。これで AV (その他類似の訳) はこれによったものと了解される。Brown, Briggs, Driver 編の *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament* についてここで問題のヘブライ語の原語 *hegeb* の意味を調べて見ると “a sigh or moan, as transient” とあり、さらにこの verse については “we bring our years to an end as a sigh, i.e. a fleeting sound” と解説している。AV では...as a tale *that is told* と従属節はイタリクスになっていて、原文には対応句のないことを示している (*loquens* にあたるとも考えられるが) が、Luther のドイツ語訳ではこれに相当する修飾節はなく、単に (wir bringen unsre Jahre zu) wie ein Geschwätz となっているのも興味がある。

sigh → breath → murmur, speech, talk と意味が発展して (as a) tale の訳が出て来る経緯は理解し得るが、LXX の Ps. 89. 9 (=90. 9) で何故 *arachnē* (=spider ('s web); =Lat. *aranea*) が使われているのか、その理由は現時点では残念ながら判然としない。‘tale’ と ‘spider’ では相関関係を認めるのが困難なように感ぜられるが、手許の LXX (Greek and English) に併記してある英訳には (For all our days are gone, and we passed away in thy wrath): our years have spun out their tale as a spider となっていて、両者を結びつける苦心が払われている。ちなみに Douay-

Rheims 訳は ‘as a spider’ の部分に対して、次のような脚注がある：

As frail and weak as a spider's web; and miserable withal, whilst like a spider<sup>8</sup> we spend our bowels in weaving webs to catch flies.

この説明の後半のイメージは elaborate に過ぎる感なきにしも非ずであるが、果敢ないものの比喩に、くもの巣が用いられている例はヨブ記 8. 14; イザヤ書 59. 5 にも見られる (AV, RV, RSV). ヨブ記 27. 18 は AV, RV では He [the wicked man] buildeth his house as a [RV, the] *moth* とあるところを RSV は The house which he builds is like a *spider's web* と改めている。これは LXX とシリア語訳聖書に従ったもので、ヘブライ語聖書は ‘moth’ に相当する語を使っている。こうして見ると LXX とシリア語訳とは spider を比喩として愛好する傾向があると言ふことができ、詩篇 90. 9 のたとえもこの一環に含めて考えることができそうである。

かつ人生の果敢ない営みの比喩には、くもの巣の方が具象性が強くてすぐれているように思われる (知恵文学に時折用いられるところを見ても) が、sigh, murmur などとの優劣は別としてシェイクスピアはとにかく as a tale を採ったのである。然しそのあとに続く that is told は that has been told 即ち既に聞いた話、従って退屈な話とも取れる句を先行の fool と結んで told by an idiot と発展させたものであろう。Romeo and Juliet の最後に近く、事件が発覚して Friar Laurence が Prince にとがめを受ける場がある：

Prince. Then say at once what thou dost know in this.

Friar Laurence. I will be brief, for my short date of breath

Is not so long as is *a tedious tale*. (V. iii. 229 ff.)

(Pr. ではさっそくこの事件について知っていることを言え。Lau. 手短かに申し上げます。私に息のあるのも僅かの間で、くだくだしい長話はできませんから)

ここでも人生の比喩に tale がからまっている。かつ a tedious tale には a tale that has been told, i.e. a twice-told tale, 即ち uninteresting → dull, tedious tale という変形・循環関係が感じられる。シェイクスピアはこの twice-told tale という句を、King John で、フランスが英国と戦



って敗れ、英王位の正当な嗣子として支援して来た Arthur も捕えられて、前途暗澹たる時、フランスの王子 Lewis がその悲運を歎く台詞の中に用いている：

There's nothing in this world can make me joy :

Life is as tedious as a twice-told tale

Vexing the dull ear of a drowsy man. (III. iv. 108 ff.)

(この世の中に一つとして自分を喜ばせるものはない。人生は眠たがっている者の鈍い耳に腹立たしく聞える陳腐な話を聞かされるようなものになってしまった)

Hawthorne がその物語集に *Twice-told Tales* の名をつけたのは、この『ジョン王』から借りたものと思われるが、ここでは often repeated familiar stories の意味ではなからうか。

\* \* \* \*

シェイクスピア劇の台詞に聞かれる言語は、ルネサンス時代の英国国民の日常用語を反映しているもので、その大部分は当時の社会生活に共通の表現であったであろうから、取り立ててこれこれにはシェイクスピアに固有の特色と見ることは不適當な場合もある。とくに聖書と関連のある語句、比喩は、その宗教生活を通じて、市民が無意識のうちに使うようになっているものが多いことであろうから、どの程度意識的に用いられているのかは判然としないこともしばしばある。然し、意識的か否かは別として、その起源または典拠を聖書に求め得るものについて研究する(時には原語の用法にまで溯って)のは、それ自身意義のあることである。僅か乍ら以上観察したところからでも、王権に関する当時の国民意識のありかたなども、聖書に準拠していることがやや確実に言えるわけであるから、これを通じ、政治家を含めて、英国国民の思想構造の一端を知るよすがとすることができるであろう。また、詩篇 90. 9 の人生を 'tale' にたとえた難解とされている句については、謎は依然残るが、同僚知友の助言を得つつ、可能な限りその由来を尋ねて見た。

## NOTES

1. *Psalter* は前述の『祈禱書』に添付してある *Psalms* を呼ぶ名である。Shakespeare の英語は *Psalms* よりむしろ *Psalter* (一般の *Psalms* と多少訳語に相違がある) と関係が深い。
2. 故松浦嘉一氏には *A Study of the Imagery of John Donne* (副題 ‘A Revelation of his Outlook on the World and his Vision of a Universal Christian Monarchy’) という精緻な研究がある。「この論文は…さらに自然と律法および王権に関する彼の思想が旧約聖書に基づいていることを証明し、そして彼が古代イスラエル王国をイギリス王国の目標と見なしたことを論じている」(『斎藤勇著作集別巻』85頁)
3. ソロモンを訪れた ‘Sheba’ の女王 (*1 Kings* 10. 1-10) は Vulgate, Bishops’ Bible, *Psalter* 72. 10 では ‘Saba’ とある。
4. 王のことを captain と呼ぶのは *Joshua* 5. 14 f.: And he [a man who stood with his sword drawn in his hand] said [to Joshua],...as a captain of the host of the Lord am I now come...And the captain of the Lord’s host said unto Joshua,...(Genevan) に見られる斜字体の語句によるものであろう。
5. ‘The (Lord’s) anointed (King)’ については拙稿『キリスト教と文学』第三集(笹淵友一編。笠間書院) 8-11 頁参照。
6. Commenting on Battenhouse’s opinion that the Duke symbolized Christ, Miss Pope remarks: ‘Any Renaissance audience would have taken it for granted that the Duke did indeed “stand for” God, but only as any good ruler “stood for” Him. (The Arden Shakespeare, *Measure for Measure*, ed. Lever, lxiv)
7. As human beings they [rulers and magistrates] were obliged, like all men, to show mercy and forgive trespasses. But in their office they were considered to function as deputies of God on earth, or as deputies of these deputies, themselves bearing the title of ‘gods’ and exercising under God the divine right to judge and condemn. (*id.*)
8. Schmidt (*Shakespeare Lexicon*) は spider を “the insect Aranea” と説明している。Shakespeare は spider を 15 ヲ所で使っているが、はかない生命を思わせる文脈では用いていない。上記 Douay-Rheims 訳の注と多少でも近似感を抱かせるのは次の 1 例だけである: My brain more busy than the labouring spider / Weaves tedious snares to trap mine enemies. (2 *Henry VI* III. ii. 339 f.)

## Résumé

### On Some Scriptural Concepts and Diction in Shakespeare

Mamoru Shimizu

At his funeral service, King Henry V was praised as “a king bless'd of the King of kings”, who “fought the battles of the Lord of hosts”. It is striking that such a concept of the ideal kingship derives from the figure of the Israelite kings in their prime of power. Even the future of the ‘infant Elizabeth’, daughter of Henry VIII, is blessed with the felicitous picture modelled upon the peaceful life of Solomonic prosperity.

Dominant among the English people was the respect for their king as being ‘the Lord’s anointed’, or ‘the deputy elected by the Lord’, as is seen in *Richard II* IV. i or *Richard III* III. i. Similar concepts of the ‘demigod Authority’ (*Measure for Measure* I. ii) and ‘the deputed sword’ (Id. II. ii) may have bearings upon the political theory of the Divine Right of Kings, which in turn seems to be based on Scriptural ideas as is evident in *Romans* 13. 1-4.

Apart from the prominent idea concerning the ideal sovereignty, a casual analysis of the text of *Henry V* reveals a number of instances of Biblical images and wordings embedded in common parlance, such as ‘th’ offending Adam’, ‘have no wings to fly from God’, ‘death is to him advantage’. Over and above its title, a variant of the *lex talionis*, *Measure for Measure* is rich in Biblical references, notwithstanding that some of them are more or less obscure. ‘Virtues go forth of us’, ‘torches do not light them for themselves’, ‘Nature lends the smallest scruples of her excellence but she determines herself the glory of a creditor, both thanks and use (=usury)’ (all in I. ii), are instances which may be taken as reminiscences of Gospel passages. It must, however, be admitted that the last of the above illustrations is somewhat elusive, because the whole is the story of the *one talent and the returning master* in disguise, as was the Duke himself, who went on a journey disguised.

Two kinds of imagery concerning the ‘candle’ or ‘light’ may be distinguished in the Bible—the one which emphasizes the giving forth of light to the world, which is prominent in the New Testament, and the other, the putting out of the light (of life), prominent in the Old Testament. Reflections of both of them can be found in Shakespeare. Macbeth’s “Out, out, brief candle!” may be taken as an instance of the latter. It often happens in Shakespeare, as in many authors, that a cluster of Biblical phrasings appear in certain passages, particularly in those that have gained special popularity. The well-known soliloquy in *Macbeth* V. v is a striking example, where, besides the apparent ‘dusty death’, the sequence of ‘candle light’ → (walking) *shadows* → (poor) *players* (→ signifying *nothing* → *vanity*) could be traced by taking into account such passages as *Job* 8.9, *Psalter* 39. 6-7.

“It is *a tale told* (by an idiot)” calls for special notice. The most likely source is *Psalter* 90. 9: “We bring our years to an end, as it were *a tale that is told*.” But why is life like a tale . . . ? A comparison of various versions makes it clear that there is one group of translators which chooses words which denote transient *breath*, such as *sigh*, *murmur*, *talk*. Another puts here quite surprisingly *a spider’s web*. The problem is, why can the same original be rendered *a breath* by some, and *a spider’s web* by others? It was further made clear that the Hebrew original favors *breath* or *sigh* (→ *talk*, *tale*), whereas, the Greek (LXX), the Syriac Version and the so-called popular ‘Gallican Psalter’ of the Vulgate (Which is Jerome’s revision of the Old Latin Version in 387 A.D.) stand for *spider*, and that the *Psalter* and AV followed the ‘Hebrew’ Psalter of the Vulgate (which is Jerome’s translation, started in 389 A.D., direct from the Hebrew). There is, however, nothing that bridges the ideas of the ‘spider’s web’ and ‘a tale’ except the English rendering of the *Greek and English LXX* of this particular verse: “our years have spun out their tale as a spider.”

One thing should be added in this connection. Against AV’s *Job* 27. 18: “(The wicked man) buildeth his house *as a moth*”, RSV puts “The house which he builds is *like a spider’s web*”, which is a translation according to LXX and the Syriac. Thus there seems to be a tendency in LXX and the Syriac to prefer the figure of *a spider* to signify something frail and transient. Further, ‘as a tale that *is told* (i.e. has been told)’ may have occasioned ‘as tedious as a twice told tale’ (*King John* III. iv).

It is sometimes open to question whether any particular Biblical reference was made wittingly. But a careful study of all such reminiscences and echoes is necessary and rewarding for the appreciation of English literature, specifically Shakespeare, who is so outstanding in the use of the Scriptures.

My thanks are due to my colleagues and friends who encouraged me in clarifying the mystery of ‘a tale that is told’, although something still remains untold.